

英語教育における異文化の扱いについて (2)  
—クラックホーン・モデルによる文化の普遍的特性—

土 屋 澄 男

HOW SHOULD CULTURES BE TAUGHT  
IN THE ENGLISH LANGUAGE CLASS ?

SUMIO TSUCHIYA

In the previous article of 1995, I discussed problems of how to deal with foreign cultures in the English language class and suggested that we should pay attention not only to different features between cultures but also to universal features hidden under all human behavior. In the present article, I will discuss how we could describe universal features underlying all human cultures by using the Kluckhohn model, which provides us with a systematic means of analyzing a particular culture's value system. Thus we will be able, I hope, to instill in our students a sense of cross-cultural awareness by providing them with the tools of identifying their own cultural value orientation as well as those of others.

1. クラックホーン・モデル

文化人類学者クラックホーン (Florence R. Kluckhohn) は、1950年代はじめ、同僚ストロットベック (Fred L. Strodbeck) と共にア

メリカ南西部地域の住民における価値志向性 (value orientations) に関する研究を行った。彼らの選んだ地域は文化的に異なる5つの集落が半径40マイル以内に点在しており、それらは1) ナヴァホ・インディアン集落、2) ズーニー・インディアン集落、3) スペイン語圏アメリカ人集落、4) モルモン教徒集落、5) テキサスとオクラホマからの入植者集落であった (2 : p. 49)。クラックホーンらは、それらの集落からのデータを分析した結果、それぞれの文化の価値志向性には一定の変異が見られることが分かった。

さらに、それらの価値志向性を分類し、変異の種類を調べているうちに、その根底に次の3つの基本的前提が想定されることを発見した (2 : p. 10)。第1に、すべての人間集団に常時解決を求められる幾つかの限られた数の共通の問題が存在すること。第2に、それらの問題の解決法には相違が見られるが、その相違は決して無限でも無作為でもなく、ある一定の可能な解決法の範囲に収まっていること。第3に、すべての社会には常に問題解決に対するあらゆる選択肢が存在するのであるが、どれを選択するか好み異なること。さらに、その選択の好みには一定の順序があること。

以上のような基本的前提に立って、クラックホーンらはすべての人間集団に共通する5つの問題を取り上げ、これらを集団の価値志向性の分析の項目とした (2 : p. 11)。

- 1) 人間の本性をどうみるか。〈人間性〉
- 2) 人と自然との関係をどうみるか。〈自然観〉
- 3) 過去・現在・未来の時のどこに焦点を置くか。〈時感覚〉
- 4) 人間の活動様式はどのようなか。〈活動様式〉
- 5) 他者との関係の様式はどのようなか。〈人間関係〉

以下にそれぞれの項目について変動の範囲を示す。

### (1) 人間性

すべての人間集団は自己および他者の人間性をどうみるかについて特定の志向性を形成している。クラックホーン・モデルは人間の本性について、まず悪、善悪、善の3つに区分する。さらに善悪について、人間の本性は善でも悪でもないとする中立の見方と、善悪の混合であるという見方を区別する。また悪、善悪、善の3つの範疇について、それぞれ可変的、不変的の下位区分をする。

### (2) 自然観

すべての人間集団は人間と自然との関係について特定の志向性を形成している。すなわち自然または自己を取り巻く世界をどうみるかの問題である。クラックホーン・モデルはこれを自然への服従、自然との調和、自然の征服の3つに区分する。

### (3) 時感覚

すべての人間集団は過去・現在・未来の時に関心があるが、いずれの時に重点を置くかは文化によって異っている。伝統を重視する文化は過去の時に、今の状況を重視する文化は現在の時に、目標志向的文化は未来の時に焦点を当てるといえる。

### (4) 活動様式

すべての人間集団は活動または存在の様式に一定の志向性が見られる。クラックホーン・モデルは人間集団の活動の仕方に影響を与え、それを支配している志向性を「在る」(being)、「成る」(being-in-becoming)、

「する」(doing)の3つの様式に分類する。「在る」の様式とは、個人の達成や業績にはあまり重点を置かず、存在すること自体に価値を見出すことである。これに対して「成る」の様式は自己の内的な向上や発展を重視する。「する」の様式は文字通り何かをすることに価値を置くもので、そこでは個人の努力や業績が高く評価される。

**(5) 人間関係**

すべての人間集団は他者との人間関係をどのように保つかに関心があり、それについての特定の価値志向性を有している。クラックホーン・モデルはこれを「たて」(lineality)、「よこ」(collaterality)、「個人主義」(individualism)の3つの様式に区分する。「たて」の様式は主従関係のような権威主義の様式が支配的である場合、「よこ」の様式は人をいちおう個人としてみなが、同時に特定集団のメンバーとしてその集団の決定に従わなければならないとする様式である。「個人主義」はすべての個人が社会において平等に扱われ、個人の自律性が尊重される様式である。

クラックホーンらが提案した以上5つの価値志向性とそれぞれの項目で予想される変動の範囲を一覧にして示すと表1 のようになる (2 : p. 12)。

**表1** クラックホーン・モデル

志向性	変 動 範 囲		
	悪	中立／善悪混合	善
人間性	自然への服従	自然との調和	自然への服従
時感覚	過去	現在	未来
活動様式	在る	成る	する
人間関係	たて	よこ	個人主義

## 2. クラックホーン・モデルによる日米文化比較

クラックホーン・モデルを用いて世界に存在するそれぞれの文化の特徴を記述することが可能であり、アメリカ文化を対象としたコールズ (L. Robert Kohls) の記述はその一例である。またそのような記述に基づいて複数の文化の特徴を比較することも可能である。ここでは比較的に研究がよくなされている日米文化に焦点を当てることにする。

米国と日本は第2次大戦後きわめて親密な関係を保ってきたが、文化の点では異なる点が多く、時に対照的でさえある。いまクラックホーン・モデルによってこれら2つの国の文化の特徴を概観してみよう。ただし、ここで記述対象とするアメリカ文化は、文化的に最も優勢と見なされる白人ミドルクラスの文化である。

### (1) 人間性について

コールズによれば、アメリカ人は一般に楽観的で人を信用しやすい (3 : p. 22)。ということは、人間は本来的に善であるという前提に立つ。そしてすべての人間にあらゆる可能性が秘められていると考える。したがって人間の基本的善を引き出すためには、それにマイナスに作用する環境的条件は直ちに排除または変革すべきだと信じている (3 : p. 23)。そういうわけでアメリカ人は社会変革を常に歓迎する。最近の日米貿易交渉におけるアメリカ側の苛立ちは、日本側の対応のなまぬるさと変革のおそさにあると言ってよいであろう。

人間の本性についての日本人の見方はアメリカ人のそれとは明らかに異なる。コールズによれば、日本人は人間の本性を善悪の混合とみる (3 : p. 26)。この分析はわれわれ日本人の経験とも一致する。われわれにとって生まれつきの悪人もいなければ、全くの善人もいないのである。

「氏より育ち」と言うように、人は生まれてから後の環境や教育に影響されるところが大きいと考える。すべての人は本来的に善と悪とが混在しており、よほど特別な訓練や修業を経験しない限り、完全な人格は期待できないのである。したがって日本人はアメリカ人のように他人を容易に信頼することがない。

## (2) 自然観について

アメリカ人は人間と自然とを明確に区別する。自然は物理的、物質的世界であり、そこに精神やたましいの存在は認めない。人間は自然界においてきわめて独自の存在であり、自然にまさる存在である。したがって、アメリカ人にとって自然は征服すべき対象であり、支配すべきものである。近年になって環境保護の立場から自然的資源の保存を求める人も現われたしたが、多くのアメリカ人は、自然の提供するさまざまな資源を個人や社会の利益のために利用することを、依然として正しいと考えている。自然を支配することは、人間と社会の向上・発展のために必要不可欠なことなのである。

これに対して、日本人にとって人間は自然の一部であり、周りの自然と調和的に生きることが最善と考えられている。この見方は日本だけでなくオリエントに広く見られるもので、アメリカの原住民であったアメリカ・インディアンの中の多くの部族にも共通した見方である。一般に古代人は、自然現象に対する素朴な畏敬の念をもっており、自然界には人間の支配の及ばない霊や魔術や神秘的な力が存在していると信じていた。人間はむしろ自然に支配されていると考えていたのである。近代科学の発達によって、人間が自然に従属しているという見方は少なくなったと思われる。しかし人間を自然の一部とみてそれと調和的に生きることを選ぶか、あるいは人間を自然よりも優位な存在とみなしてそれを支配することを選ぶかは、これか

らの人類の将来をも左右する大問題となっている。

### (3) 時感覚について

クラックホーン・モデルによれば、あらゆる文化は過去・現在・未来の時を扱うが、それらの強調の度合い、または強調の順序が文化によって異なるという。アメリカ人は一般に過去や伝統への関心がうすい。それはアメリカ人の多くがヨーロッパや他の大陸からの移住者で、過去の伝統から自らを切り離そうとした人たち、またはそのような生活を余儀なくされた人たちであったからであろう。彼らは概して未来に対して楽観的で、未来を信じている。したがって現在に対する関心も低い。今日はよりよい明日への一里塚にすぎないのである。

日本人はアメリカ人と同様に過去・現在・未来を一直線に延びる道路のように線的にとらえているが、過去にこだわるという点で大きく異なる。現在が未来に至る一時点であることは知っているが、未来に関する計画の際にまず意識されるのが過去の前例であり、前例のない事柄を決断する場合には大きな勇気を必要とするのである。これは恐らく先祖崇拜という長い歴史と関係があると思われる。われわれの現在は過去あつての現在であり、未来は過去と現在から切り離しては存在し得ないのである。松本青也はアメリカ人の「楽観志向」に対して日本人の「悲観志向」を特質の一つに挙げているが、これは時の見方に由来するところが大きいであろう (6 : p. 133)。

### (4) 活動様式について

アメリカ社会における活動様式が「する」の様式であることに異議をとねる人はいないであろう。人が何をするか、何を達成するかが彼らの関心事であり、人はそれによって評価される。人々は絶えず自分たち

が評価に値する人間であることを証明しなければならない。それも外的な基準によって測定できる目に見える業績が要求されるのである。そういうわけでアメリカ人は常に活動的であり、絶えず動きまわる。じっとしているのは怠け者であり、怠惰は悪魔のなせるわざである。“Idle hands are the devil's workshop.”ということわざがそれをよく表している。これは恐らくアメリカにおけるプロテスタント倫理がその背景にあるのであろう。

日本においても勤勉は尊ばれ、「する」の活動様式が好まれる。しかしアメリカ人のように業績一辺倒ではない。たとえば人の採用に際しての重要な評価項目に「人柄」というのがあり、どんなに業績があってもこの項目に問題があると採用されないのが普通である。それは日本の社会が人の「和」を大切にすることと関係するであろう。集団の和を乱す恐れのある者は敬遠されるのである。

また日本においては禅の「心を静めることによって得られる高次の宗教的内面的体験」（広辞苑）の考え方への共感がある。瞑想によって自己の内面を向上させることに憧れをもつ人は多い。コールズは日本文化の特質の一つとして「成る」様式と「する」様式の混在を挙げている（3：p. 26）。

##### (5) 人間関係について

アメリカ文化の一大特徴は個人主義である。アメリカ人は自己を一個の個人とみなし、自他を明確に区別する。幼い頃から自律性が尊重され、自分自身の頭で考え、自分自身で判断するように訓練される。自分自身の問題を解決するのも通常ひとりで行う。時に他人に忠告を求めることもあるが、それに頼ることはしない。最終的判断は常に自己の責任で行う。このような個人主義的態度は、アメリカ人は普通のことと考えてい

るが、時に自己主張の強い傲慢なアメリカ人という印象を他国の人に与える。ともかく、自己または個人がアメリカ文化の核であり、アメリカ社会はそれを軸にして動いているのである。

人間関係に関して日本文化はアメリカ文化と対照的である。松本によれば、アメリカ文化の「個人志向」に対して日本文化は「集団志向」である (6 : p. 38)。日本人は群れたがる人種であり、皆と一緒にいる時にこそ安定するのである。これは日本の社会が人種的にも言語的にも比較的と同質であり、皆と同じことをしていれば安全だからであろう。したがって、日本でアメリカ人のように自分の権利や自由を主張すると、「あいつは個人主義だ」と悪口を言われることになる。日本では個人主義は利己主義と同一視されているからである。

上記のことと関連して、日本文化はアメリカの自律的文化と対照的に非自律的文化であると言うことができる。松本の用語によれば「依存志向」の文化である (6 : p. 59)。それはまた土居健郎の「甘え」という日本特有の用語によってのみ記述が可能な文化である。そこでは人々が互いに寄りかかり合いながら生きていこうとする。したがってそこで尊重される徳目は「義理」や「人情」であり、尊重される性格特性は「優しさ」であり、「思いやり」である。自己主張は「我がまま」として嫌われる。可能な限り対立を避け、対立しそうになると「まあまあ」で曖昧にしてしまう。それで世の中うまくまとまって、波風立たずに過ぎて行くのがよいと考えるのである。

また、アメリカ社会が少なくとも表層のレベルでは「よこ社会」であるのに対して、日本社会はしばしば指摘されるように「たて社会」である。家族における親の権威は日本でも急激に低下してしまったが、学校や会社における人間関係は依然として「たて」の様式が支配的である。学年が一つでも上であれば常に「先輩」であり、死ぬまで「先輩」であ

り続ける。一方で日本は「集団志向」の社会であるから、家族のきずなだけでなく、同窓のよしみ、同じ会社の社員であるという同族意識が非常に強い。私は「〇〇大学のわたし」であり、「〇〇物産のわたし」なのである。クラックホーン・モデルで言えば、日本文化はその人間関係の様式において「非個人主義」であり、「たて」と「よこ」の二面性を有する文化である。

**表2** クラックホーン・モデルによる日米文化比較

志向性	アメリカ文化	日本文化
人間性	善／楽観的	善悪混合／悲観的
自然観	自然の征服	自然との調和
時感覚	未来志向	過去志向
活動様式	「する」様式	「成る」様式
人間関係	個人主義	「たて」＋「よこ」関係

### 3. クラックホーン・モデルと文化の普遍的特性

人は先祖から受け継いだ自分の文化をふだん意識することはほとんどない。文化はわれわれの現実の一部になってしまっているもので、現実そのものがあるべき姿だと思い込んでいる場合が多い。そこで自分の文化と異質な文化に出会うと、「変な文化」と感じてしまう。世界に存在する多様な文化的変異を考慮することができないからである。文化人類学者ホールは次のように述べている（1：p. 54-55）。

“Until recently, man did not need to be aware of the structure of his own behavioral systems, because, staying at home, the behavior of most people was highly predictable. Today, however, man is constantly interacting with strangers, because his

extensions have both widened his range and caused his world to shrink. It is therefore necessary for man to transcend his own culture, and this can be done only by making explicit the rules by which it operates.”

(最近まで、人は自分自身の行動体系がどんな構造をなしているかを意識する必要がなかった。自分の国にいれば、たいいていの人々の行動を予測することができたからである。しかし、今日、人は絶えずよそから来た人々と交流している。人の行動範囲が拡大したために、世界が縮小したからである。そこで人は自分自身の文化を超越する必要が生じてきた。そしてそれは、そこに働くルールを明らかにすることによってのみ可能となる。)

21世紀を迎えようとしている今日、われわれはますます自分自身の文化を超越することの必要性を感じている。クラックホーン・モデルによってこの問題を以下に考察する。

### (1) 人間性について

いかなる社会においても善人と悪人が共存しているという現実を目を向けるならば、人間の本性が善であるか悪であるかという問題は決して実践的な議論とはなり得ず、どうしても観念的なものとなる。クラックホーンもこの点に関してすべての文化を善、悪、善悪混合などの範疇に明確に区分できるわけではないことを示唆している (2 : p. 12)。たとえばアメリカにおいては、アメリカ大陸に最初にやって来たピュアリタンたちは人間の本性を基本的に悪であるとした。しかし多くの文化人類学者たちはこの見方はもはや古いと見ている。今日のアメリカ人は人間の本性を善悪の混合とみなしており、善は絶えざる努力と自制によって

達成できるという見方がむしろ一般的である。また、コールズのようにそれを善であるとする見方を肯定する人も多いと思われる(3: p. 23)。

日本人はすでに見たように人間の本性を善悪の混合とみる。この点で現代のアメリカ人とさほど変るところはない。しかし日本人の特徴は、人間が生まれつき善なのか、悪なのか、それとも善悪混合なのか、あるいは18世紀の啓蒙思想家ルソーが主張したように人間は本来善でも悪でもないのか、というような議論を好まないことである。そのような問題を議論しても何も得るところがないと考えるからである。難しい問題は黑白を明確にせず、玉虫色にするというのが日本人の国民性なのである。

いずれにせよ、クラックホーンも示唆するように、人間の本性が不変的に悪であるとか善であるというような文化は存在しないのではないか。すべての文化はその両極の間にあり、その多くは中立または善悪の混合という中間の座標に位置すると思われる。この点で地球上の人間は互いに理解し合える可能性がある。ただ恐ろしいのは宗教的なドグマである。

## (2) 自然観について

アメリカ人が自然を征服すべき対象とみるのに対して、日本人は自然と人間との調和を求めるという記述は歴史的には正しいであろう。アメリカの歴史は未開の土地を切り拓くという文字通りの自然との闘いの歴史であり、彼らの文化はその中から生まれたのである。それに対して日本の文化は豊かな自然の中での農耕の歴史から生まれたものである。しかし今世紀におけるすさまじいテクノロジーの発達は日本文化をも否応なしに変えてしまった。産業化と都市化の波は日本国土の隅々にまで波及し、至る所に道路がはしり、鉄道が敷かれ、橋が架けられた。自然と人間との調和は日本人の生活の中心的思想であると考えられるが、い

まその調和が破られることに多くの人々が危機意識をもっている。

このような危機意識は日本だけではなく、幸いにして、ヨーロッパ諸国を中心として世界に広がりつつある。自然との調和の思想は中国にも古くから存在するものであり、世界のそれぞれの文化がこの点から点検され、見直されることが望まれる。また同時に、世界各国における環境教育がいつそう研究され、実行されることも期待される。われわれの英語教育も環境保護や公害問題の題材をいつそう深く取り上げることになるであろう。

### (3) 時感覚について

言語がすべて過去・現在・未来に対応する文法形式を所有するわけではないが、すべての文化はこれら3つの基本時制に関する概念を所有している。クラックホーンによれば、違っているのはどの時を重視するかである (2: p. 14)。たとえばスペイン語圏アメリカ人は人間を自然界の力の犠牲者とみなし、現在の時を中心に考える。そこでは過去に起った事柄は無視され、未来は漠然としていて予測不可能とみなされる。これに対して中国や日本の文化は祖先を崇拜し、伝統を重んじる文化で、概して過去を他の時に優先させる文化である。イギリスやヨーロッパの古い歴史をもつ国々においても同様の傾向が見られる。一方「より大きくより良く」(bigger and better) を期待するアメリカ人は未来を重く見る。過去や現在を考えないわけではないが、過去は過去にすぎず、現在はより良き未来のためにあるのである。この考えは物事は絶えず変化するという前提に立つ。自己も社会も変化するものであり、変化こそが生の基本なのである。

しかし、時に関するこのような文化の違いは、昨今判然としなくなってきた。日本や中国の文化は、かつては、たしかに過去の伝統を重

んじる文化であり、その傾向は現在も変わらない。しかしかつての家系と  
 いうような家族の伝統にしがみつくと文化は徐々に失われつつある。多く  
 の日本人は依然として先祖の墓参りに行きはするが、ふだん自分の家族  
 の伝統を意識することは少ない。それよりも、昨今のすさまじい国際化  
 と情報化のあらしは、人々の関心を否応なく明日へと向ける。アメリカ  
 人のように未来をより良いものと見るか、それよりも悲観的なものと見  
 るかの違いはあるが、現代は人々の視点を過去よりも現在や未来に移さ  
 せずにはおかないであろう。かつてのように、現在に起ることは過去に  
 起ったことの繰返しであり、未来において何も新しいことは起らないと  
 いう信念は確実に崩れつつある。

#### (4) 活動様式について

クラックホーン・モデルの活動に関する3つの様式はいかなる文化にも  
 も存在するものである。日本人は「成る」の様式を好むと言っても、す  
 べての日本人がそうとは限らない。中にはアメリカ人以上に「する」様  
 式を好む人もいる。同様にすべてのアメリカ人が「する」様式を好むわ  
 けではない。クラックホーンの言わんとするのは、その文化においてど  
 の様式に最も価値を置くかということである。したがってアメリカ人の  
 中で「する」以外の活動様式を好む人は、アメリカにおいては変わり者  
 と見られ、その人の真価が認められないかもしれない。

日本でも、最近、アメリカなどからの帰国者の中に、日本は住みにく  
 いと言う人たちのことを耳にする。アメリカ文化の中で「する」の活動  
 様式を身につけ、常に活動的で自分の意見をはっきりと主張する人は日  
 本の社会では受け入れられないのである。自己主張は自己表現の一様式  
 であり、「個人主義」と相まって「する」様式の一つの典型的な現れで  
 ある。そのような文化は日本においては依然として異質なのである。

興味があるのは、世界におけるこれからの文化交流の中で、どの活動様式が最も普遍的価値をもつかということであろう。人間があるがままに受け入れられる文化が理想のようにも思えるが、人間の意志や努力がますます尊重される競争社会においては、やはり「成る」や「する」の様式が好まれるであろう。しかし攻撃的な自己主張に価値を置く文化が最善であるとも思えない。それはそうでない文化を地球の片隅に追いやってしまう危険性があるからである。

### (5) 人間関係について

「個人主義」と「集団志向」というアメリカ人と日本人の対比は、両文化の違いを最もよく表しているように思われる。しかしこれも程度の問題である。いかなる時代においても、個人の自律性を完全に封じてしまうような社会は存在しなかったであろうし、現在も存在しないであろう。もしあったとしても、そのような社会体制は長続きしなかったであろう。一方で個人の自律性を最大限に制限しようとした国家はこれまでいくらでも存在したし、これからも存在する可能性はある。また、個人は社会や国家のほんの一要素にすぎないのだから、社会や国家の利益のために個人を犠牲にすることをよしとする考え方もあり得る。国家の命令で戦地に送られる兵士たちは常にこの問題に直面する。「個人主義」の国に住むアメリカ人が他国で行われる戦争のために命を落とし、「集団志向」の日本人がそれを見物していればよいというのは何とも皮肉な光景である。アメリカには、想像以上に愛国者が多いのである。

「個人主義」と「集団志向」はどちらかの文化がすぐれているということではないように思われる。人間はすべて個人であると共に集団の一員だからである。個人にとって問題なのは、個人であることと集団の一員であることとどのように調和させていくかにある。個人の自律性を前

面に出すならば、個人の権利や自由を最大限に拡張するという方向に向かうであろうから、集団への順応性は失われ、集団の結束性は弱められる。集団への順応性を優先するならば、集団の結束性は強められるであろうが、個人の権利や自由は失われるであろう。最近のアメリカと中国との人権問題をめぐる対立にはこうした文化の根底にある考え方の相違を見ることができる。しかし人類というマクロな集団を考える時、われわれはそれぞれの文化にどんな変化を期待したらよいであろうか。われわれは一概に中国またはアメリカの肩をもつわけにはいかない。その意味で、人権問題は教育の場面において最も扱いの難しい問題の一つである。われわれは、ここで、もっと新しいグローバルな価値の創造を考えざるを得ないのである。

#### 4. むすびー普遍的価値の追及とグローバル文化の創造

国際平和調査研究所（オスロ、1959年）を設立したヨハン・ガルツング教授は最近のインタビューの中で次のように語っている（4 : p. 6）。

“In ever-widening circles in the world, to be monoglot is like being illiterate, a condition to do something about.”

（世界の中の交流の輪がどんどん広がっていく中で、ひとつの言語しかできない人は文字を知らない人みたいなもので、何とかしなければならぬ状態なのです。）

インタビューの中で、教授はさらに、他の文化の基本についての知識のないことはまことに困ったことで、矯正を必要とする「悪いマナー」であると述べている。この記事を読んで、私たちが英語はなぜ必要か、外国語は何のために学ぶのか、というような議論を呑気にやっている時

代は過ぎたのではないかと感じた。だいいち、「外国語」というような言葉そのものが古色蒼然として、21世紀にはもはや古語となるのではないかとさえ思われる。

21世紀には日本人が日本語と英語を使うのは当然のことで、コミュニケーションまでとはいかなくても、他の2、3の言語を知っていることは常識となるであろう。なぜなら、次の世紀に人類が生き延びるためには、われわれは多文化・多言語の共存するグローバルな文化を創造することが必須だからである。それに失敗した時、人類は間違いなく滅亡への道を歩むことになる。

多文化・多言語のグローバル文化を創るためには、すべての人間が地球市民としての教育を受けなければならない。「グローバル教育」ということが西側諸国で発展しつつある。わが国の英語教育も、次の世紀に日本人がいかにして自分自身の文化を超越するかという課題に真剣に取り組まねばならない。

## 参考文献

1. Hall, Edward T. *Beyond Culture*. Anchor Books Edition, 1977.
2. Kluckhohn, Florence R. & Fred L. Strodtbeck. *Variations in Value Orientations*. Row, Peterson and Company, 1961.
3. Kohls, L. Robert. *Survival Kit For Overseas Living*. 2nd Edition. Intercultural Press, 1984.
4. McInnis, Donna J. "An Interview with Johan Galtung." *The Language Teacher* 20:11 (1996):6-8.
5. Ortuño, Marian M. "Cross-Cultural Awareness in the Foreign Language Class: The Kluckhohn Model." *The Modern Language Journal* 75, iv (1991):449-459.

6. 松本青也『日米文化の特質——文化変形規則(CTR)をめぐって——』  
研究社出版, 1994.